

第 36 回教育学部大久保農場収穫祭のご報告

教育学部大久保農場主任 荒木祐二 (技術分野)

11月4日(金)に埼玉大学教育学部大久保農場にて、技術分野の「栽培技術の基礎(実習を主とする)」受講生一同ならびに大久保農場の主催による収穫祭が行われました。

当日は、大学から齊藤理事兼副学長、渡邊理事兼事務局長、川又副学長、堀田副学長、広報渉外室の武藤氏、教育学部から細渕学部長、萩生田先生、塩野支援室事務長、榊原事務長代理、藤田学務係長、森口氏、森田氏、佐藤氏、塚本氏がご参加くださいました。また、さいたま市長からメッセージを頂戴しました。



司会は技術分野1年生の竹澤君が務め、はじめに農場主任である筆者が収穫祭の趣旨説明と大久保農場の活動概要を述べました。つづいて齊藤理事兼副学長から、「大学の教育改革において学力の三要素が掲げられている。それは①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性・多様性・協働性である。農場の学習では①は当然ながら、②について作物の状況を見て思考・判断し、表現も求められる。③も多様性以外は技術の学生は学んでいる。これを他分野の学生にもぜひ伝えて、協働してほしい。」といった受講生に向けたご挨拶を賜りました。続いて、川又副学長から「収穫祭を意味する“Harvest”はラテン語で“Herbesco”となり、これには「芽を出す」という意味も含まれる。収穫した後に新しいものが芽を出し、次の実りに向かう“Herbesco”の祭りが収穫祭。新しい芽吹きとその先の実りを祈念して乾杯。」というご挨拶と乾杯の音頭の下、宴が始まりました。

歓談の合間には、ご来賓を代表して細渕学部長より「収穫祭への参加は5回目、過去には大鍋がこぼれたことを覚えている。行事自体は料理にもつ煮が出るなど年々発展している。入試制度の変革にあたり、小学校コースにはいろんな関心のある人が集まっている。技術は人間の生きる基礎・基盤を大切にしており、収穫の味を楽しめる専修だから、みんなで入学者を増やしてほしい。」という励ましのお言葉を頂戴し、つづいて塩野事務長から「学生、役員、職員と一緒に集う場はほかにまずない。学生はこの機会を利用してほしい。収穫祭には新人の時に参加して歌わされ



このたびの、第36回教育学部大久保農場収穫祭の御開催を心よりお喜び申し上げます。

本日の収穫祭が実り多き充実したものとなりますことを期待しますとともに、貴校の更なる御発展をお祈りいたします。

平成28年11月吉日

さいたま市長 清水 勇人



たのを覚えている。当時は灯りがなく、床は土間で穴倉の中にいるようだった。これが授業をするところかと思っていたが、いまではエアコンが整備されるなど設備が整っている。必要なことをもっと要求すればいいことが起こるかもしれない。」という過去の回想と農場改善に向けた助言をしていただきました。その後、農場講義室内のプロジェクターを利用して、浅子技能補佐員より栽培実習のようすが上映されました。つづいて受講生による余興があり、突然の消灯と沈黙の後、ICTを活用した努力作品（委細は学生の感想を参照）が上映されるとともに、狭いスペース内にてダンスや水晶玉を使ったパフォーマンスが披露されて会場は大いに盛り上がりました。最後に全員で埼玉大学歌を斉唱し、前農場主任の石田先生による「大学歌は各クラブでも歌ってほしい。収穫祭は年々楽しくなり、より高度になってきている。農場は、無農薬栽培により生物多様性に富んでいる。皆さんも土壌微生物と同じくらい多様といえる。この多様性がこれからの日本を支える。伝統ある行事を今後も続けてほしい。」という中締めのご挨拶をもってお開きとなりました。

収穫祭は五穀豊穡を祝うとともに、大久保農場の運営にかかわる皆様との親睦を図る貴重な機会ととらえております。同時に、それまで何気なく栽培実習を受講していた学生たちが、自分たちが育てた作物の品質をご来賓の方々に評価していただく経験を通して、実習の意義と達成感を味わえる行事です。受講生が主役となって役員や教職員の皆様を招待し、厳かなながらも和気藹々と楽しめるこの収穫祭が、これからも農場運営に携わる皆様と受講生らの交流の場になることを願っています。今後も大久保農場の活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2016年収穫祭を終えて

松本侑真（技術分野1年生）

収穫祭は、中学校コース技術分野の1年生と小学校コースからものづくりと情報分野へきた2年生が主催者となり、育ててきた作物を使った料理を囲い、埼玉大学の教職員の皆様とともに食事をするという行事です。同時に、収穫祭は作物がしっかり育って収穫出来たことを祝うこと、自分達の育てた作物の出来を確認すること、栽培の授業とは何を行っているのかを知ってもらうこと、このような大事な意味が込められた行事でもあります。



初めに収穫祭を開催すると聞いた時、軽い気持ちで自分達が育てた作物を食べるだけだろうと思っていましたが、先輩たちから収穫祭は毎年恒例で伝統ある行事で、埼玉大学の学長などがいらして栽培の授業についての話をするのを聞いて、成功させなければいけないという気持ちになりました。収穫祭に向けて、司会、食事係、会計係、会場係、余興係に分かれて準備を行いました。僕は余興係として収穫祭に向けて準備を始めました。今年の余興ではあらかじめ映像を撮り、リアルタイムで中継しているようにし、収穫祭の様子を伝えるというニュース形式の映像を流した後にダンスを踊るという形で行いました。映像を何回もみんなで撮り直し、綿密に打ち合わせを行った甲斐があり、会場で予想以上の反響や先輩に四年間で一番良い余興だったとコメントをもらえたためとても達成感がありました。他の係の人たちも自分達の役割を果たし、他の係の手伝いをするなどして収穫祭をスムーズに行うことができました。

収穫祭が始まり、食事をとっている時に周りを見渡してみると参加して下さった来賓者の方々、先生方、栽培学研究室の先輩方、主催者である栽培実習の受講者、みんなが笑顔で食事を取り、話を交わしている光景を見て楽しい収穫祭となって成功したなと思いました。自分達が栽培した食物とは思えないくらい収穫祭の食べ物はとても美味しく感じました。浅子先生による実習のスライドショーを通して、実際に出てくる食事の素材がどう生産されたかを見ていただくことによって、来賓者の方々に栽培という授業でどのような事を行っているのか知っていただけたと思います。こうして全体を振り返って見ると、楽しい収穫祭という面だけでなく、本来の収穫祭の大事な意味もしっかりと感じて伝える事が出来た素晴らしい収穫祭になったのではないかと思います。

収穫祭をスムーズに進められたのは栽培学研究室の先輩方、先生方の手伝いがあったおかげです。僕たちが当日に集合した時には浅子先生が鍋を温めるようにいつもの入り口に壁を設置したり、先輩方が机の配置や飾り付けなどの指示を出してくれたり、食事中に来賓者の飲み物がなくなったら一番に気づき出してくれるなど僕たちだけでは気づけないところや出来ないところをカバーしてくれました。先輩方から収穫祭を楽しむだけでなく、来賓者に気を配り、瞬時に何が足りなくて、今何をすれば良いかなどを考え行動する事も学びました。このように、収穫祭を通してこれから活かしていける経験も出来たので今年の収穫祭も大成功に終わったと思います。収穫祭で得た経験をこれからの人生に活かしていきたいと思います。

